



OBのつぶやき

無言のお説教

鹿児島県PTA連合会 元副会長 海江田 宗順

良寛和尚は、由緒正しい家柄の長男でしたが、継ぐべき橘屋の身代を弟の由之に任せて出家したのです。

或る日、由之から息子の馬之助の放蕩ほうたうさに困りはてている。説教して欲しいと便りがありました。

その依頼を受けて久々に故郷の実家に帰りましたが、二日たつても三日たつても説教も忠告もありません。とうとう、三日目の朝に寺から使いが来て帰ることになりました。

その朝、良寛は馬之助に草鞋わらじの紐を結んでくれるよう頼みました。言われるままに草鞋の紐を結び始めた馬之助でしたがその手にポトリと熱い物が降り注いできました。ふと見上げると、そこには目にいっぱい涙をためた良寛さんの顔がありました。良寛はそのまま帰って行きましたが、馬之助の放蕩はその日を境にすっかり収まったのです。

きつく説教されるか叱られるかに違いないと思っていた馬之助には、良寛の悲哀のこもった顔と涙が心に深く刻まれたのです。自分のことを思っていてくれている人がここに居る。期待に背いてばかりいると、反省の念にさいなまれたのです。

私たちは、問題を抱えた子供たちを非難したり説教したりしがちです。

しかし、それより、一緒に悩んだり苦しんだりしながら共に解決策を探っていくことが、何よりも大切だということを良寛の逸話から学ぶことです。

